
君は忘却の彼方に

岡本大樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は忘却の彼方に

【Nコード】

N0210D

【作者名】

岡本大樹

【あらすじ】

とある兄妹の話。この兄妹には秘密があった。本当は知ってるのに、怖かった思い出を封印するかのように忘れてしまっていた、まだ二人が小さかった頃の出来事。それを思い出した兄の拓海と妹の美紅は…。

プロローグ

「美紅、あんまり深いところまで行くなよ？」

「うん！」

虫達の大合唱が聞こえる森の中。

そして透き通るような綺麗な小川。

日差しが乱反射して輝く水面。

俺達は田舎の親戚の家に遊びに来ていた。

「お兄ちゃん、これなんておさかな？」

「うーん…なんだろ」

「たべれるの？」

「わかんない。よし、捕まえてみるか」

水の中に手を入れると、その小さな魚はサッと逃げてしまう。

「あ…逃げちゃった」

「くそー……」

妹の前でカッコつけたのはいいが、魚を素手で捕まえるのは到底無理だった。

「おまえが急に近づくからだぞ」

「美紅のせいじゃないよ！お兄ちゃんがヘタクソだから」

「このっ」

ぽかっと美紅の頭を叩いてしまった。

「いたっ…うわああああん！」

泣き出した。

叩いたら泣いてしまうのがわかっててやった。

子供なんてこんなものだ。

やっていい事と悪い事の区別などあるわけもなく、我が儘で、実直。

美紅がわんわん泣いているのを見て、罪悪感こそあるものの、こいつは一度泣き出すとなかなか泣き止まない。

宥めるのが面倒で、俺は視線を小川に向けて歩き出した。

よく見ると綺麗な石がたくさん落ちている。

俺は夢中になってそれを拾い始めた。

美紅が泣いているのも忘れて、宝探しに没頭していた。

どれくらい時間が経っただろう。

ふと辺りを見回すと、森の中が不気味なくらい静寂に包まれていた。鳥の鳴き声がかすかに聞こえる。

以前にもこの景色を見たような気がする。
懐かしいような、不思議な感覚に襲われた。

気が付くと美紅はいなくなっていた。

まるで神隠しにでも遭ったように、忽然と姿を消していた。
始めからそこには俺一人だったかのように。

「美紅：？」

俺は小川を川上に向かって歩き出した。

あいつどこにいったんだろう？

それとも始めからここには俺しかいなかったのか？
人が消えるなんてあり得ない。

「もしかして夢かな」

そう、俺は気が付いた。

これは夢だ。

けど、この景色に見覚えはある。

それに美紅と小川で遊んだのも覚えてるけど、今俺は夢の中にいる。
それをはっきりと認識した。

プロローグ（後書き）

十話くらいで終わる予定です。

どうか温かく見守ってやってください。

あと、感想など頂けるとありがたいです！

目を開けると、暖かい日差しがカーテンの隙間から差し込んでいる。とある夏の日、俺は全身から吹き出した汗と蒸し暑さで目が覚めた。まだ夢と現実がごちゃごちゃになっていて、余韻が残っていた。

確か小さい頃、母親の実家の山の中で、妹と遊んだ夢。

俺が6歳で、美紅が4歳の頃だったか。

今でもぼんやりとはあるが、覚えていた。

次第に意識がはっきりしてきて、今日の予定を思い出した。

明日からお盆で、今日は美紅と二人で電車に乗って、母親の実家のほづに泊まりに行くことになっていたのだ。

どんな夢を見ていたのか、この時にはもう忘れてしまっていた。

起きて居間に向かうと、美紅はもう既に起きていたらしい。パジャマ姿で、ソファに体育座りという格好でテレビを見ていた。

「おい、妹よ。兄のお目覚め…くあああ」

喋ってる途中で欠伸が出た。

「珍しいね、この時間に起きてくるの」

驚いた表情でこちらを見ていた。

妹の美紅は今年で高校2年生。

時が経つのは早いもので、ついこの間までは泣いてばかりいる子供だと思っていたのに、いつの間にかこいつも大人になりつつある。割とかわいいやつで、余談だが、小学校からの幼馴染は、あの頃俺と一緒にあって美紅をいじめていたというのに、今になって紹介しろと言ってくる始末。

男なんてそんなもんだ。

もしかしたらあの頃から好きだったのかもしれないけど。

まあ俺にとっては今も昔も変わらず、美紅は妹でしかないが。

「あー気持ち悪い…」

「汗すごい…クーラーつけなかったの？」

「健康に悪いだろ」

「そっちのほうで健康に悪いよ…」

「シャワーでも浴びるわ。覗くなよー」

「覗くわけないでしょ」

気持ち悪い汗を流す為に風呂場に向かった。

シャワーを浴びて居間に戻ると、美紅が麦茶を用意してくれていた。こう見えて結構気が利くよな。

「水分取らないと脱水症状起こしちゃうから」

「おう、悪いな」

それを一気に飲み干すと、体中に水分が行き渡る。

「あー生き返った」

「ねえねえ、今日楽しみなね」

「ん？」

「あの電車」

「ああ。懐かしいよな。最後に乗ったのは小学校の頃だったっけ」

美紅が言ってる電車というのは、今日の俺達の目的地が終点となっている、景観を楽しむという別の目的を持った観光列車のことだ。最後尾が展望車両になっており、夏なんかは風が涼しくて、眺めが良くて、小さい頃の俺達が感動してはしゃいでいたのを覚えてる。

「でもあの時は楽しむどころじゃなかったんだぞ、俺は」

「どうして？」

「父さんと母さんがいなくて、俺一人に美紅のこと押し付けられて内心ヒヤヒヤもんだっただぜ？」

「でも私は楽しかったなー。お兄ちゃんと二人きりだから、わくわくしてたもん」

「おまえは気楽でいいよな…」

兄というのは妹を守るべき存在だというような話を、俺は小さい頃から親に言い聞かされて育った。

それに反発して美紅のことをいじめていた時期もあった。

俺もガキだったよな…。

今回も親には美紅のことをまかせられている。

ただあの頃と違うのは、そのことを面倒だと思わなくなったことだな。

この歳になって精神的に余裕が出来たからか、それともこいつが俺に面倒をかけるような子供じゃなくなったからだろうか。

その後俺達は朝の支度を済ませて、自分の部屋で荷物の整理をしていた。

とりあえずトランプは持ってかないとな。

なんせこれから行く場所は、文明社会に乗り遅れたド田舎だ。

ゲームセンターやカラオケボックスなどあるわけもなく、美紅や従妹と遊ぶことになったらこれが無難だろう。

…絶対飽きる！

急に行くのが面倒になってきた…。

着替え等の荷物も詰め終わって、俺は美紅の部屋に向かった。

「美紅ー、準備出来たか？」

「出来たよ。お兄ちゃんは？」

「俺も出来たぞ。下に降りてるからな」

「あ、待って、私も行く！」

美紅と階段を降りて玄関に荷物を置いた。
これでいつでも出発出来るが…

「どうする？早いけどそろそろ出るか？」

「うん、そうだね」

丁度その時、奥から父さんと母さんが見送りに出てきた。

「行くのか？」

「ああ。まだ少し早いけどな」

「拓海、美紅のこと頼むぞ」

と、父さん。

娘ばかり可愛がりやがって。

「はいはい、わかってるよ」

「お婆ちゃん達によろしくね」

と、母さん。

「おう、よろしく言っとく。んじゃそろそろ行くわ」

「いつてきまーす！」

「気を付けてね」

母さんと父さんに見送られながら、俺達は駅に向かった。

最寄の駅は歩いて10分程の街中にある。

俺達の家は街と住宅街の、丁度境目。

二人並んで駅を目指した。

駅に着くと、俺達と同じく大きな荷物を持った人達が並んでいる。
丁度帰省ラッシュだからな。

あの観光列車に乗り換えるまでは、結構混んでいるかもしれない。

乗り換える駅までの切符を買って、俺達は改札口を抜けると駅の水
ームで電車を待つことにした。

しばらくして電車がやってくる。

案の定電車内は混んでいて、乗車率150%といった感じだ。

「わー、すごい人…」

「この時期だからなー」

乗り換えるまでの辛抱だと思い、人で溢れ返った電車内に乗り込んだ。
だ。

中はクーラーが効いているはずなのに、この熱気はどういうことだ
…。

後から後から人が入ってきて、俺と美紅はぎゅうぎゅう詰めにされて
いた。

さつきから美紅の胸が俺の腹のあたりに押し付けられている。

…痴漢の気持ちが少しだけわかった。

乗り換えの駅は1時間程で着いた。

その頃には電車内も大分空いていたように見える。

俺達は冷え冷えの電車内から熱気に溢れている駅のホームに躍り出た。

「うばあ」

あまりの温度差に変な声が出る。

「何か飲み物買つて？」

言いながら美紅は俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

「なんだよ、ジュースごときで色仕掛けか？」

「うん、だってお金持ってきてないもん」

「は！？嘘だろ？」

「本当ー」

この愚妹がー！絶対確信犯だ！

「だから向こうにいる間はよろしくねー」

「マジかよ…でもまあ、あのト田舎じゃそんなに金使うことはないし、別にいいか」

「うん。お祭りの時お願いね」

ん？お祭り…？

「何だよお祭りって」

「あれ？お兄ちゃん知らないの？」

「知らん」

「お盆祭りがあるっておばあちゃんから聞いたよ」

「お、おい、出店とかないよな？な？」

「あるから楽しみなさいって言ってたー」

キヤツキヤツとはしゃぎ出す美紅。

とりあえず殴った。

「いったあーい！何するの！」

「俺はおまえのサイフじゃねえんだよ！」

こいつは祭りになると飲むわ食うわでそれはもう大変だ。
それに田舎のお祭りだから、ここぞとばかりにぼったくるに決まっ
てる…。

「いいじゃん、バイトしてお金持ってるんだから」

「俺が汗水垂らして働いたってところは無視か！」

「うん、無視！」

な、なんて…なんて我が儘で、それでいて自分の非を省みない女に
育ってしまったんだ…。

「泣きたい…」

「おーよしよし、元気出して」

頭を撫でられた。

なんかもうどうでもいい…。

「元気出ねえよボケ…」

観光列車の乗車ホームに向かうと、こちらは老年夫婦や家族連れと
いったカテゴリーの人々が多く見受けられる。
独特の雰囲気、この電車に乗ると昭和にタイムスリップしてしま
うんじゃないかという不思議な感覚に陥る。

つつーか、

「あちーって！いつまで腕絡ませてんだ！」

「嬉しくない？」

「あのな、俺にそんなこと聞いてどうすんだよ」

「んー、どうもしないよ」

「じゃあやめればいいのに…」。

自販機でジュースを2つ買って、俺達は電車内に乗り込んだ。
全席指定席で、前日に買っておいた切符の番号の席を見つけて腰を下ろす。

俺は美紅にジュースを渡して、自分もタブを開けてそれを喉に流し込んだ。

それから約5分後、電車がゆっくりと動き出す。

次第に窓から見える景色が電車の早さに合わせて流れ出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210d/>

君は忘却の彼方に

2010年10月10日05時58分発行